

航天科技集団(CASC) VS 航天科工集団(CASIC)

1. はじめに

このたび中国航天科工集団(CASIC)の構成組織についてのまとめを当事務所サイトに掲載しました。昨年掲載の航天科技集団(CASC)情報と併せ、これで中国のロケット・ミサイル関連組織の全体像が概観できるだろうというのが、作者の期待であります。

しかし中国に詳しくない人にとってはどうなのでしょう？ 同じような名前の研究所や会社がゾロゾロ並んでいるばかりで、なかなか頭に入らないのではないかと（実は私の場合、「AI ナントカ」という名前が大量に掲載されている中東関係リストを見たとき、そんな気分になります） CISTEC の参考書『対中国輸出管理 軍事転用・拡散顧客情報分析ガイド』（以下「ガイド」と略記）を見ても、鈍感な私などは「科技・科工どちらも色々やっているんだなあ」的な感慨どまりというのが正直なところです。

そこで本稿では、両者について①基本性格、②傘下の研究院の番号、に焦点を当てて私の理解をまとめておきたいと思えます。

2. 基本性格の違い

はじめに強調しておきたいのは、航天科技と 航天科工という 2 集団体制が、政策で決定されたものだということです。トヨタと日産のような、元々別々の企業が同じような事業を営んでいるのとはわけが違います。その証拠に、航天科技と・航天科工の両者は、元々は航天工業総公司という 1 個の組織から 1999 年に分かれて成立したもののなものです。当然、異なる役割が賦与されていた筈です。

両者の役割を端的に表した戯れ歌があります。航天科工第二研究院の職員の作だそうですが、そのサワリを引用します。（附録 1 に全文収録したので興味のある方はどうぞ）

他们是为了和平事业往天上飞 我们是为了战争事业往天上扔

（奴らは平和のために天上をいき 俺達は戦争のため天上にぶっぱなす。）

要するに航天科技は宇宙開発、航天科工は戦争が使命だと述べているわけです。もっとも航天科技が宇宙開発だけでなく、長距離ミサイルにも注力しているのは周知の事実。そして長距離ミサイルの開発は、宇宙開発と技術的に親和性が高い。また長距離ミサイルの発射実験を公然と行うことは困難ですから、ロケット打ち上げは長距離ミサイル実験も兼ねている。

そんなわけで、ミサイルに焦点を当てて四捨五入すると、**航天科技の使命は宇宙開発に名を借りた長距離ミサイル、航天科工の方は名実ともに軍用である中短距離ミサイル**、ということになると思えます。（もちろん例外は沢山あるでしょう。たとえば航天科工の開発した技術であっても宇宙ロケットに応用可能なもの、反対に航天科技の開発した技術で短距離ミサイルにも有用なもの、とか。しかしあくまでも上記が基本線と思えます）

3. 研究院番号の考察

航天科技の構成組織をはじめ調べてとき、気になったのが研究院番号の欠番でした。
なぜ第一があって、第二・第三がないのだろうか？

同じことは航天科工にもいえます。第二～第四があって、第五は欠番で、第六がある。

理由は両者が元は一つの組織（航天工業総公司）に属していたからでした。つまり総公司傘下の研究院は一から始まる続き番号を持っていたのが、1999年、航天工業総公司から両者が分離独立した際に、元の背番号のままで新しい母体に移ったというわけです。（プロ野球の球団にたとえるなら、新球団の発足にあたり、選手が以前の背番号のまま移籍したようなもの）

では重複は？

お察しの通り、分離独立後に集団内で背番号が変わったり、「支配下選手登録」された連中の新しい背番号が、もう一方の集団のメンバーの背番号とかぶった結果です。

両者に属する研究院を番号順にまとめました。網掛けしてあるのが1999年創立時からの研究院です。

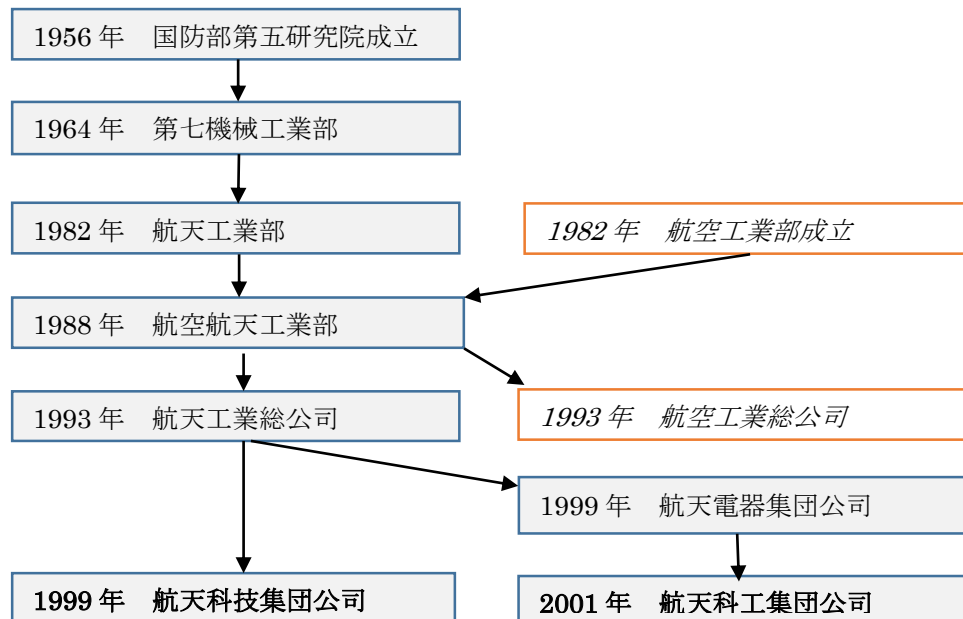
	航天科技	航天科工
第1	運載火箭技術研究院(北京)	航天科工信息技術研究院(北京)
第2	—	航天科工防禦技術研究院(北京)
第3	—	航天科工飛航技術研究院(北京)
第4	動力技術研究院(西安)	航天科工運載技術研究院(武漢)
第5	空間技術研究院(北京)	—
第6	推進技術研究院(西安)	航天科工動力技術研究院(フフホト)
第7	四川航天技術研究院	航天建築設計研究院
第8	上海航天技術研究院	—
第9	航天電子技術研究院(北京)	* 1
第10	* 2	貴州航天技術研究院(貴州)
第11	航天空気動力技術研究院(北京)	—

* 1 航天科工第九研究院（別名航天三江集団）は第四研究院と合併、現在は第四研究院（新四院）。なお新四院の本部所在地は元九院があった武漢に置かれている。

* 2 2001年に航天時代儀器公司を母体とする第十研究院が成立したが、現在は姿を消してしまった。（約十年前にネットで見た覚えがあるのだがどこへ消えたのやら）

機構変遷の系譜をざっと見てみましょう。

まずは全体像。



次は傘下の研究院単位で。

これは附録2の『瞭望東方周刊』を参考にまとめました。

名称	前身及び主な事業分野
科技一院(運載火箭)/北京	国防部五院第一分院(地对地/大陸間弾道弾)
四院(動力技術)/西安	国防部五院第四分院(固体ロケット)
五院(空間技術)/北京	第七機械部第五分院(衛星)
六院(推進技術)/西安	067 基地(液体ロケット) から 2001 年昇格…ルーツは一院
七院(四川)	062 基地から 2005 年昇格…ルーツは一院
八院(上海)	上海市第二機電工業局(衛星/ミサイル)
九院(電子技術)/北京	2009 年に 13 所・16 所などの上部機構として設立。時代電子公司(2003 年設立)の「基礎の上に」というが、住所も同じなので同一組織のように見える。(慣性航法/無人機など)
十一院(空気動力)/北京	北京空気動力研究所(1956 年設立) から研究院に 2004 年昇格
科工一院(信息技术)/北京	2002 年設立。特定の前身組織はないと思う。(CISTEC「ガイド」や<百度百科>は「国防五院が前身」というが、それは科工集団の全ての組織にいえることなので特段の意味はない)
二院(防衛技術)/北京	国防部五院第二分院(地对空)
三院(飛航技術)/北京	国防部五院第三分院(巡航)
四院(運載技術)/武漢	元九院=三江集團(別名 066 基地…ルーツは三院)・元四院(巨浪ミサイル開発機関) が合体して成立(2011 年)
六院(動力技術)/内蒙古	国防部五院第四分院(固体ロケット)
十院(貴州)	061 基地(別名江南集團) から 2015 年昇格…ルーツは二院

(表中「XXX 基地」についての情報は<百度百科>の「三線建設」の項による)

<附録1> 航天科工第二研究院氏の戯れ歌

<p>他们是把人送上蓝天, 我们是把人送上西天。 他们的对象是自己人, 我们的目标是敌人。 他们那么小气, 打出去了还要! 我们那么大方, 打出去就算了! 他们干的是光明正大显威扬名的活 我们干的是偷偷摸摸遮遮掩掩的活 他们发的是钱 我们发的是火 他们高兴的是又成功了 我们高兴的是没掉下来 打仗还是要靠我们底 打仗真要靠我们就完了底 他们中的成功人士能在报纸上看到, 我们的优秀代表只能将来在历史书上找。 他们成功了国家希望知道的人越多越好, 我们成功了,国家希望知道的人越少越好。 他们的成功对外说叫宣传, 我们的成功对外说叫泄密。 他们是为了和平事业往天上飞 我们是为了战争事业往天上扔。 他们飞过留名, 我们飞过留声。 他们钱途美好 我们前途无光。 他们搞的型号地球人都知道了, 我们的型号即使是在局域网上也叫 XX-XX 。 他们向上面要钱打着和平的旗号, 我们要钱打着战争的旗号。 他们飞向蓝蓝的太空, 我们飞向敌人的舰船。</p>	<p>奴らは人を青空へ送り出し 俺達は人を極楽へ送り込む。 奴らの対象はわれらが国民 俺たちの目標は敵国民だ。 奴らはけちんぼ、発射後回収に精を出す 俺たちは太っ腹、発射したら後はもうよし。 奴らは日の下堂々とあゆみ 俺たちはこそそと足音をしのばせる。 奴らが発散するのは金 俺たちが発散するのは火。 奴らの喜びは成功で 俺たちの喜びは落ちてこないこと。 だが戦争するには俺たちが頼り 俺たちだけが頼りさ。 奴らのエリートは新聞紙上に登場するが 俺たちのエースは未来の歴史書を探さなきゃ見つからぬ おかみは奴らの成功を知る人が多いことを望み だが俺たちの成功は知る人が少ないことを望んでいる 奴らが成功すれば大いに宣伝されるが 俺達が成功しても対外的には秘密。 奴らは平和のために天上を行き 俺達は戦争のため天上にぶっぱなす。 奴らは名を残し 俺達は轟音を残す。 奴らの前途は明るく 俺達の前途に光はない。 奴らの作った型名は世界中が知るだろうが 俺達の型名は「XX型」と内部で呼ばれるだけ。 奴らは予算を平和の名のもとに 俺達は戦争の名のもとに要求する。 奴らが飛ぶ先はあの青い大空 俺達が飛ぶ先は敵の軍艦。</p>
--	---

<附録 2 > 「从国防部五院到航天集团：中国航天院所發展史」
(国防部五院から航天集团へ)

…『瞭望東方周刊』より。掲載時期は 2013 年 6 月と思われる。同月に複数の Web サイトが引用しているので

- 《瞭望东方周刊》特约撰稿吴铭 | 北京报道

从钱学森领衔的国防部第五研究院，到今天的中国航天科技集团与中国航天科工集团，中国的航天事业走过了被称为传奇的 50 多个年头。

本刊日前采访了中国运载火箭技术研究院总体设计室原支部书记、火箭控制专家李法瑞，以及 1992 年开始担任“长征二号丙”运载火箭总设计师的李占奎，请他们梳理中国航天体系的发展脉络。

显赫的国防部五院

1956 年 10 月 8 日，聂荣臻来到北京西郊原解放军第 466 医院的小礼堂，宣布国防部第五研究院正式成立，成为中国第一个导弹研究机构。

次年，周恩来签署国务院令，正式任命钱学森为国防部五院院长。很快，中央军委的导弹管理局、即“国防部第五局”，在 1957 年 3 月并入国防部五院。最终，国防部五院成立两个分院，一分院即今天的中国运载火箭技术研究院，位于南苑。二分院位于永定路。

李法瑞介绍，1957 年 11 月成立一分院的时候，共设立了 8 个研究室：第一研究室是总体设计室，第二研究室是结构强度研究室，第三研究室是空气动力研究室，第四研究室是火箭发动机研究室，第五研究室是冲压发动机研究室，第六研究室是化学推进剂研究室，第七研究室是材料研究室，第八研究室是测试研究室。

第二年，第一研究室改称为总体设计部，第四研究室改为发动机设计部。其他的几个室也相继发生变化。1961 年，第二研究室更名为强度研究所，第七研究室改为材料研究所，第八研究室改为遥测设备研究所。

1958 年总体设计室改为总体设计部后，下面成立了专业室，有总体室、结构室、遥测室、伺服机构室等五六个室。“室下面就是工程组，完全是按专业分。”李占奎说。

1961 年 9 月 1 日，在长辛店成立了国防部五院三分院。现为中国航天科技集团中国飞航技术研究院。

李法瑞解释说，最初的几年里这三个分院就作了比较大的调整。

一分院几个单位划到二分院、三分院，二分院、三分院的一些单位又划分到一分院，真正定下来是在 1965 年。“原来包括地地导弹、地空导弹、飞航式导弹的火箭总体设计都在一分院，到了大概 1963 年就分开了，地地导弹型号归一分院管，地空导弹型号归二分院管，三分院负责管理海防方面的飞航式导弹。就这样，一直沿袭了下来。”

1962 年 7 月，国防部五院在四川泸州建立了中国第一个固体火箭发动机研究所。1964 年 4 月，改称国防部五院四分院。

按照原来部队的编制，所属于司局级，室属于团级。”李占奎解释说。

作为中国航天事业的开端，钱学森领衔的国防部五院至今仍被视为 1949 年以来中国最著名的传奇。

附錄 2 (その 2)

改革中的“七机部”

1964年12月26日，三届全国人大一次会议通过成立第七机械工业部的决议。李法瑞解释，服务于七机部的研究所，统一以“7”开头，按照序列命名为701所、702所、703所，等等。

与此同时，国防部五院一分院更名为第七机械工业部第一研究院。它后来先后更名为航天工业部第一研究院、航天工业总公司第一研究院、中国航天科技集团公司第一研究院等，亦称为中国运载火箭技术研究院。

李法瑞介绍，第一研究院下辖的研究所以“1”开头，按照序列代号分别为11所、12所、13所、14所、15所、17所、19所。

原打算成立的新的专业所16所、18所赶上“文革”被耽搁了，直到前几年，才设立18所。“17所在20世纪80年代划到二院去了。”

“一分院的时候叫室，后来改称部所：没转业之前叫部，转业以后叫所。”李占奎说。

11所是原来的总体设计部，按照专业下有总体室、结构室、遥测室、弹头室、伺服机构室、设计保障室等11个室。

“按照型号分最多时有5个总体室，每个总体室负责一个型号。从1969年到1974年，逐步撤销总体室，后来变成2个总体室。”李法瑞详细解释。

随着国防部五院改为七机部，相关单位完成集体转业。“正式脱军装是1965年6月1号。5月31号之前可以穿军装，6月1号以后就不能穿军装了。”李法瑞说。

1965年，国防部五院四分院改称七机部第四研究院，并从四川泸州搬迁到内蒙古自治区呼和浩特。1978年起，这个单位先后改称内蒙古自治区第七工业局、七机部第四研究院驻内蒙古指挥部。

1999年7月，国防科技工业十大集团公司成立，“内蒙古基地”改为中国航天科工集团第六研究院。

“航天四院”，名称为“航天动力技术研究院”。它始建于1962年7月1日，是中国规模最大、实力最强的固体火箭发动机基础理论研究、设计、研制、生产和各种试验基地。

1968年2月20日，经毛泽东批准，成立中国空间技术研究院，即第七机械工业部第五研究院，亦称“七机部五院”。

作为中国空间技术的主要研究中心和航天器研制、生产基地，它的主要任务是：参与制定国家空间技术发展规划，研究、探索和开发利用外层空间的技术途径，承接用户需求的各类航天器和地面设备的研制及提供优良的服务，空间技术成果的推广应用，以及空间技术对外交流技术与合作。

附録2 (その3)

老专业基础上分出来的新院

其后七机部又经历了航天工业部、航空航天工业部及中国航空工业总公司和中国航天工业总公司（国家航天局）的历史沿革，直至 1999 年，组建成立了现在的中国航天科技集团、中国航天科工集团。

李法瑞介绍，**后来的六院、七院、九院、十一院等都是专业调整后设立的。**

现在位于西安的“**六院**”是最初在秦岭山区的“067 基地”，创建于 1965 年，在 1981 年命名为“六院”，是中国液体火箭发动机研制中心和专业抓总单位，承担着为中国运载火箭和导弹武器提供液体火箭发动机的重任。“是把中国航天科技集团中和发动机有关的研究所集中在一起，成立的发动机动力装置研究院。”现在名称为“航天推进技术研究院”。

“**七院**”是四川的“062 基地”。早期在川北地区五六个主要搞生产的工厂后来搬到成都，和四川地区的工厂、研究所合并后，成为现在的“七院”，即“四川航天技术研究院”。

“**八院**”是之前的上海航天局，现在隶属于中国航天科技集团公司，名称为“上海航天技术研究院”，始创于 1961 年 8 月，最早称为上海机电二局。“既研究火箭，也研究卫星。”

“**九院**”是中国航天科技集团把几个搞电子元器件的机构合并在一起成立的。院址也在北京，叫“中国航天电子技术研究院”。

“十院”现在空缺。

“**十一院**”是在最早的空气动力研究室的基础上发展而成的研究所，后来变成“中国航天空气动力技术研究院”。

李占奎总结，中国航天科技集团下辖一院、四院、五院、六院（西安）、七院、八院、九院、十一院，等等。中国航天科工集团下辖二院、三院，以及“老四院”在内蒙古呼和浩特的部分，现称为“航天科工六院”，另外，还有搞基建的“航天科工七院”，等等。

这些默默运行的机构，最终支撑着“神舟”和“嫦娥”的飞天之旅。

(责任编辑：曾宪楠)